

『諸國童謡大全』序

泉鏡

花作

明治四十二年九月

山の観るべきなく、水の賞すべきなく、風俗の探るべきなき、僻土寒村の一落と雖も、凡そ人住んで、童謡俚歌の聞くべきものあらざるなし。此を聞く時、千本の松原、音戸の瀬戸、遠く浪を想ひ、眼前に月を髣髴す。はた傳説を引承し、靈異を感受し、戀愛を可懐む。吾が人類は、鳥に笑み、蟲に泣く。而して渠等をして泣かしむべく、笑はしむべく、石も點頭き、猛獸も尚ほ低徊すべきは、此の謠の正調曲唱ならずや。花淚子其の趣味に憧憬して、經營十数年、日に日にこれ勉めつゝ、こゝに採録するもの、其の數約三萬と註せらる。然り、同種の書類の中に未曾有の大集なり。以て我が國到る處の童謡を聞くを得んか。（明治四十二年八月吉日）